

上の空。バレバレだ。朝からずっと、真つ赤に染まった先輩の白シャツが、その手元から滑り落ちたフルートが、脳裏にこびりついたままだ。先生は吹奏楽部の顧問をしている。だから知っている。私のことも、先輩のことも、今日という日が、どんな日かも……」

SE 授業の終わりを告げるチャイム

恭子「ねえ、でるってよ」

里美「絶対ウソ。ありえんでしょ」

千歌「なに？ なんの話？」

恭子「鬼火がでたの」

千歌「鬼火？」

恭子「火の玉。濃尾大橋の堤防でさ、目撃者多数。うちの弟もその一人。部活の帰りにみたって」

里美「あのねえ、火の玉なんて原理は雷と一緒ッ。雨雲と地表の間にたまった静電気が

……」

恭子「（遮って）なんでも科学で説明できる  
と思うなよ」

里美「できるし。森羅万象すべて説明つく」

恭子「（呆れて）さすがの科学部。里美の頭  
ん中、数式で出来てんじゃない？」

里美「むしろ褒め言葉に聞こえるぞ」

千歌「よしなって。（恭子に）ホントにでた  
の？」

恭子「知ってる？ 濃尾大橋が完成したのは  
昭和三一年なんだけど、工事中に、三人亡  
くなったんだって」

里美「その幽霊が出たと？ 今頃になって？  
こっちが数式なら、恭子の頭ん中フアンタ  
ジーだわ」

恭子「そうやって話をすり替える。ホントは、  
怖いんでしょ？」

里美「んなわけあるか。非科学的だし」

恭子「じゃ今夜、肝試ししない？ 尾張一宮  
鬼火捜索隊、結成い！」

里美 「バカバカしい」

恭子 「怖いんだ？」

里美 「上靴で殴られたい？」

千歌 「私はなんか、気になるな……」

里美 「気になる？」

恭子 「だよねえ、気になるよねえ」

千歌 (M) 「私は思い出す。亡くなったお婆ちゃんと言ってた……鬼火は、なにか伝えたいことがあるときに、でるって……」

SE 夜風

千歌 (M) 「私たちは夜八時、金刀比羅神社前で集まると、懐中電灯片手に木曾川の河川敷へ降りていく。秋の夜風がひんやりして、首筋が震える」

里美 「(ホン) ツとにもう、でるわけないでしよ……でたああああ！ (叫ぶ)」

千歌 「え？」

恭子 「マジか (茫然)」

